

和魂洋才 世界のリーダーへ

武田薬品工業^⑭

挑戦 する企業

—ITを駆使

「デジタルイノベーションを実践し、他拠点へ輸出していく」。武田薬品工業の光工場（山口県光市）で工場長を務める藤原英喜は意気込む。武田は医療用医薬品の生産体制再編を進めてきた。2018年度末を目標に、大阪工場（大阪市淀川区）における固形製剤の製造をドイツのオラ

存在感増す国内製造拠点

ニエンブルク工場（ブラデンブルク州）と光工場へ移管する計画。これを完遂するだけでも光工場の存在感は増すと言えそうだが、藤原の理想は高い。ITを駆使し、一層の生産性向上を追求する

いないかを自視で検査し、自動化を進めてきた。この業務を、AIを基にしたカメラに代わらせる。大阪工場から移す二つの包装ラインでも19年以降に順次、AIを実用化。AIの有用性が確認できた場合、類似

技術革新の成果を“輸出”

る考えを示す。具体策として、12月に光工場の包装ラインで人工知能（AI）を導入する。従来は同じ包装ライン上で包装対象製品を切り替える際、それまで包装していた製品が残って

の包装ラインを持つ海外工場への横展開も検討していく。光工場では原薬製造でもAIやビッグデータ（大量データ）の活用を。光工場では主に、低分子医薬品やワクチンを扱ってきた。生物由来の

新手法に対応

ただ今後、光工場はモダリティ（創薬手法）の変化に対応する必要もある。光工場では主に、低分子医薬品やワクチンを扱ってきた。生物由来の日本

バイオ医薬品は潰瘍性大腸炎などの治療薬「エンティビオ」の製剤や包装を実施中だが、バイオ薬全般の実績という意味では豊富とはいえない。日本の製造部門を統括



光工場で原薬の製造工程を管理する計器室

するグレッグ・ティモンズは、新薬候補物質の製造法開発を手がける研究開発部門との情報共有を推進。「（低分子以外の）新規モダリティの製品化までには時間的猶予があり、（光工場の設備や人員について）さまざまな選択肢を検討している」。革新的な製品でも品質と安定供給を堅持すべく、入念な対応が求められる。（敬称略）